

国家的な拉致です。そして、酷寒、飢餓、重労働で六万人以上と言われる人たちが倒れて凍った土地の下で無念の思いで眠っているのです。この事実を私たちは決して忘れてはならないと思うのです。風化させてはなりません。何のために、戦争が終わったというのにシベリアに強制連行されて大勢の日本人が死ななければならなかったのか、六十余年経った今も、私の心の中では答えが出ておりません。

最後にシベリアの凍土に今も無念の思いで眠っている御霊に対して、皆さんとご冥福をお祈りしたいと思います。

シベリア抑留生活

愛知県 今井昭治

戦争が終わって六十三年が経過しました。大日本帝国が戦に敗れて敗戦国となった悲しみと情けなさは、当時の日本人の誰しもが感じたことと思います。外地の戦場におった者の悲しみは、敵中におり、これから先がどうなることか分からないという非常に大変な心配事がありました。

日ソ中立条約を破って旧満州へ侵攻してきたソ連軍は、終戦となると私たちを武装解除した後に日本国に帰国させると嘘を言ってだましてソ連領に連れ込み、大きな船の着く港まで汽車で行き、そこから船に乗って東京ダモイだと、貨物列車に荷物同様に押し込まれましたが、日本に帰ると思う希望があるために不自由な列車生活を我慢しましたが、着いて下車したところは港ではなく、どこであるか全くわからないシベリア鉄道の支線の

奥地の終点の小さな駅であった。

後になって分かってきたが、ハバロフスクからさらに北方へ約四百キロも入ったコムソモリスクの支線の駅で、後に強制労働させられて建設したバーム鉄道の駅になる場所であった。

下車したところからトラックに乗せられてその地域の一番奥の収容所に収容されました。この収容所にはドイツ軍の捕虜が収容されておりましたが、私たち日本軍の捕虜と交代して、私たちの乗ってきたトラックに乗せられて、いずれかへ連れて行かれました。

このときから、私たち日本軍の将兵の抑留生活が始まりました。収容所生活が始まった日は昭和二十(一九四五)年十月三十一日で、戦前の明治節の三日前でした。三日後の十一月三日の明治節の日に収容者全員が一カ所に集合させられて、日本の宮城と思われる方向に向かって整列させられ、日本刀を持った日本軍の将校が「宮城遥拝、頭ら中」の号令で宮城を遥拝してから国歌の合唱にな

りまして、「君が代」と歌い始めましたが、歌が進むにつれて、一人泣き、二人泣きと泣き出す者が多くなり、遂に国歌を歌う者がなくなり、泣き声が収容所内に響きました。

これから先の行き先がどうなるか分からず、お先真っ暗でそれぞれが泣きながら丸木造りの宿舎に帰りました。このころは、全員が気落ちして誰一人として話し合うことがなく、自分のおるところがどこであるかも分からず、これから先生きておれるのか殺されるのか、もし帰国できるとしてもそれぞれがいつごろになるもすべてのことが分からず、人生の末路のような気がして話し合いなどできませんでした。

こうして抑留生活が始まりました。抑留生活の苦しさを要約しますと、第一にシベリアの極寒の中で夏服姿で過ごす生活、第二は食べ物らしい物が何一つない飢餓の生活、第三は過酷な強制労働で、この三つが重なりましてシベリア抑留の地獄になったわけです。

シベリア募参の旅は昭和六十三年ごろのソ連時代から毎年行っておりますが、いずれも暑い夏です。最初シベリア募参に行ったときに、シベリアに夏があるのかと思いましたが、シベリア抑留を三年三カ月過ごしましたが、シベリアの夏の思い出は何一つ残っておりません。

そこで、極寒のシベリアに行つて募参しようと考えて募参に行く人を集めました。誰一人も賛同してくれず行くことはできませんでしたが、諦めきれず参加する人を探しておりましたところ、平成十三（二〇〇一）年一月に女五人、男二人の計七人が同意してくれましたので、平成十三年一月二十九日に新潟空港を出発して地獄のような生活をしたシベリアに行き、枕木一本、日本人の命一つと言われたような過酷な労働をさせられたバーム鉄道全線に乗る旅に出かけました。そうして要所、要所で下車して募参をしてきました。バイカル湖の北端のセビロスカヤバイカルというところに行つたときは、二月五日ごろでしたが、零下

五三度でした。自動車の中から外に出たとたん、平手で顔をぶん殴られるような痛みを感じました。これがシベリアの寒さです。

その後、本年二月九日に再度シベリア募参に行きました。この旅は息子と息子の友人一人を連れて行きました。募参が目的ですが、二人の若い者にシベリアの寒さとシベリアの寒さの中に日本に帰ることなく凍土の中に眠っておられる戦友たちのこととシベリア抑留生活のことを現地の寒さの中で語り聞かそうと思つて連れて行きました。平成十三年二月に行つたときより少し暖かく感じましたが、ハバロフスクで零下一五度ぐらい、コムソモリスクで零下二〇度ぐらいでした。

墓地で募参をして帰りかけたときに、息子が「親父、こんな寒いところで三年以上生活をして、よく生きて帰つてこれだな」と顔を見ながら言ってくれました。このとき、この寒さの中で一口でもいい、白い米の飯を食べてから死にたいと言いなから飯一口も食べることなく、この寒さの中で日

本を思い、親、妻子のことを思いながら死んでいった戦友たちの苦痛の話をしました。零下二〇度の寒さの中でシベリア抑留生活の状況を話すと、シベリア抑留生活の大変だったことが分かってくれたように思いました。

夏の暮参りと違って、極寒の中で墓標に向かって手を合わせておりますと、何不自由なく暮らしており、生きて帰ってきた者が何と云ってお参りしてよいか迷いましたが、寒いシベリアの風を身に受けてお参りをして、この寒さの中で横たわっている戦友が少しは分かってくれたように思われました。

話を前に戻して、私が初めて収容された収容所は第三〇三収容所でした。この収容所は、私の部隊の関東軍経理部が主体の編成大隊であったために、比較的に良い状態でごせましたが、昭和二十一年一月末に身体検査があり、一級に分類されて三〇四収容所に移動しました。

当時、抑留者間の情報などないときでしたが、

三〇四収容所については「魔の収容所」または「地獄の収容所」であると噂されておる収容所でした。なぜこうした噂が流れたかと言うと、三〇四収容所で四百人から五百人の抑留者が伝染病で死亡しております上に、日本人の隊長が、終戦前の将校同様に抑留者の食べる物まで取り上げて食べて、部下たちが死ぬような生活をしておるのを知りながら、楽に暮らしてソ連側の要求をすべて引き受けて抑留者を酷使しておったので、この状態に対して怒った日本の下士官が棒でたたき殺したという地獄そのものの収容所でした。

この収容所に移動することとなったが、地獄収容所と分かっておっても、敗戦国の抑留の身であっては行くしかなかったのである。

シベリアの冬は日が短くて、日が出てから三時間ぐらいで暗くなってしまうので、この地獄収容所に到着したときは、日が暮れて建物等の施設の状態は少しも分かりませんでした。入所説明では、この収容所は六百人ぐらいを収容する収容所であ

るが、現在千人ぐらい収容されており、炊事も一回では食事ができないので、各食事とも二回に分けて給食すると説明されました。

朝食が午前三時ごろと六時の二回で、他の食事は作業の状態に応じて給食されるということであったが、作業が厳しくて定められた時間に食べることはなかった。食べる時間がないのでなく、食べる物がなかったのである。

朝食も食事とは名ばかりで、塩湯の中に大豆かエンドウマメの皮が数個浮いているような食事であった。

午前三時ごろ、真っ暗闇の中炊事場に行き、塩湯のようなスープの分配を受けて、軍隊時代の梅干か佃煮の入っておった木の桶を抱えるように持って運んでおると、突然、闇の中から飯盒が出てきて、抱えておる桶の中に突っ込みスープをすくって逃げ行くが、このとき桶を下において泥棒と追いかけて行くと、置いた桶ぐるみ盗まれてしまうので、追いかけることができず、盗まれるまま

にしておくより方法がなかった。

食パンの分配にしましても、入所当時は軍隊の分隊組織で入っておったので分隊長が分配していたが、階級の上の者から分配するので階級の下の方はほとんど分配されない状態であった。こうした分配方式では弱者から死んでいくので、分配方式について文句を言ったところ、最初はじゃんけんで分配したパンを受け取る順番を決めていたが、時間がかかるとじゃんけんをする気力もないので、それぞれが白樺の皮を持ってきてこの白樺のあみだくじを作り、分配者と受取順番を決めて、この方法で分配をしておりましたが、分配のときは二つの目を皿のように分配を見つめて、少しでも多少がないか見ておりました。

ある日、パンの分配が終わり、受け取ったパンを自分の寝床の二階に登るために梯子のところにおいて二階に登ろうとした瞬間に、暗闇の中から手が出てきてパンを盗みにかかりましたので、命より大事なパンを盗まれては大変と思って、暗闇

の中から出てきた泥棒の手を押さえたが、そのときパンは崩れて私の手に残ったパンは硬い皮の部分が三、四センチぐらいしかありませんでした。白樺の皮に火をつけて下に落ちたパンくずがないか探しましたが、一片もありませんでした。このときほど、敗戦の情けない作業と淋しさと苦しさを感じたことはありませんでした。このとき年齢十九歳でした。

零下何十度となる極寒のシベリアでは、食べ物は何一つなく、他人の物でも盗んで食べなければ死んでしまうという地獄そのものの生活でした。

この収容所での作業は伐採の仕事をしておりましたが、今考えてみますと、零下何十度という気温の中の樹木は凍っており、街の中に建っておるコンクリートの電柱のような木であったと思いません。このコンクリートのような木を相棒とのこぎりでコリコリと切りましたが、相棒の名前も所属部隊も知らずこの誰であるかも分かりません。お互いにそれぞれの身元を聞く余裕ありません

でした。こうした状態の中で段々体力がなくなり、いつまで生きておれるかも分からなくなってきました。

切り倒した松の木の幹に近い皮が飴か何かのように見えましたので、タポールで細かく切って口の中に放り込みました。味も何もあつたものではありませんが、何か食べないと死んでしまうと思うあまり食べましたが、これを食べると便秘になり、これで命を落とす人も出てきましたが、何か腹の中に入れないと命を落とすことになると思ひ、食べました。

こうした状況の中でこのぎりを挽きながら作業をしておりますと、日本人の馬方がソ連人の馬方の親方のところに行き、防寒帽の中に何か入れてもらっておるのが見えました。何をもらっておるかを見ておりますと、帽子の中に何か入れてもらった馬方は、火が燃えておるところまで行き、馬を木につないで自分は腰に下げている缶に、もらってきた物を入れて炒っております。馬方と

どれだけ離れていたか忘れましたが、食べ物も炒っておる匂いがしてきました。腹をすかしておるときに食べ物の匂いがしてきましたので、我を忘れてふらふらと匂いにつられて馬方の兵隊のところにいき、思わず防寒手袋をはめたまま手を差し出しますと、その馬方の兵隊は驚いて真っ黒な顔をして私を睨みつけましたが、何を思ったかわかりませんが、黙って缶の中から炒った物を少し取り出して私の手袋の上に乗せてくれました。お礼を言う暇もなく口の中に放り込み噛みますと、馬の餌の燕麦でした。うまかった、今でもそのときの味は忘れることができません。さらに手を出してもらうこともできず、口の中に残った食べかすを噛んでおりました。

シベリアに抑留されてから手や顔を洗うことはありません。洗う気力もありませんと同時に、極寒のシベリアには水は凍ってしまつて水はありません。炊事に使う水は近くのエバラン湖で爆破した氷を馬槌で運んでそれを溶かして使っております。

すので、一般の抑留者は手や顔を洗う水がありません。電気もランプもありませんので、白樺の皮か松ヤニを持ってきて各人が灯として使うのですから、顔は真っ黒でした。

馬の餌の燕麦を食べて思ったのは、この収容所生活で生き残るには、馬方をやって馬の餌をピンはねして食べておれば命を保つことができるかもしれないと思い、その日の夕方から宿舎に帰ってからソ連人の馬方の部屋を探し出して、ロシア語は少しも話すことはできませんが、必死で身振り手振りで、自分は農家の出身で農業のために馬を使つておつたから馬使いに慣れておるから馬方にしてくれと頼みましたが、馬方の親方に話が通じずおっぼり出されてしまいました。馬方をやらないうと日本に帰れなくなるから、一度でだめでも使つてもらうまで何回でも行つて頼もうと考えて、それから毎晩、親方の部屋に行つて頼みました。六、七回目だと思いますが、馬の親方の機嫌が良くて、部屋に行つていつものように馬方にして

くれと頼みますと「サジース」と言ってくれました。

サジースとは、座れという言葉ですから、椅子に腰を下ろすと、マホルカーという煙草を取り出して吸えと言ってくれたのでマホルカーを吸っておりますと、馬方にしてやるから明日朝、馬舎に来るように言ってくれました。このときは、飛び上がるぐらいに嬉しくなりました。

これで馬の餌を食べることができて命を落とさなくても良いかもしれないと思い、思わず両手を合わせて親方を拝みました。抑留されておる組織の中でこうして自分勝手に仕事を変えることができたことが、今から思うと不思議ですが、自分の命を守るためにやったのが天に通じたものと思います。

翌朝、馬舎に行き親方の家に入ると、親方は待っておってくれて馬舎に連れて行ってくれました。馬舎には五、六十頭の馬がおりました。そうして見ておりますと、日本人やソ連人が馬を取りに来

ました。馬は誰の馬か決まっておらず、その日、その日に来た順番で馬を引き出して行きますが、残っておる馬は悪い癖のある馬がおりました。自分に合った馬を見つけて引き出して馬装をするのですが、馬を扱ったことがないのでどうしてよいかわかりませんが、馬方の親方が手伝って馬装してくれました。そのうちに慣れて一人でできるようになりましたが、零下三〇度ぐらいの寒さの中で手袋をとって馬装することは大変でした。それでも馬方をしておれば馬の餌をピンはねして食べることができると思うと、一生懸命やることができました。

馬方になり、昼の馬の餌付けのときに親方のところに行きまして、防寒帽を脱いでこの中に馬の餌を入れてもらい馬を引いて火の焚いてあるところに行つて馬を木につなぎ、餌を馬にやらす、自分の缶に入れて炒つて口の中に放り込んで食べました。何気なく馬の顔を見ましたところ、馬が恨めしそうな顔をして私を睨んでおりました。「お

れの餌をおれに食べさせず、自分が馬番をして食べておる。北の神兵とまで言われた関東軍の兵隊も戦に敗れるとこんなみじめな人間になるのか」というような顔をして私を見ておるように思いましたので、夕食の足しにするつもりで防寒服のポケットに入れていた燕麦を取り出して馬に食べさせました。ペロツと一なめに食べてしまいました。

この馬もおそらく敗戦前は日本軍の軍馬として日本のどこからか徴集されてきた馬で、軍馬として働いていたが敗戦でソ連に連れ込まれて酷使されていた馬だと思えます。この戦場で一緒に働いた、いわば戦友である馬の餌を馬に食べさせずに自分で食べておる奴は最低な奴だと思つて睨んでいたものと思えます。

馬の餌をピンはねしながら食べて材木を運搬しておるうちに、ソ連軍の技術少佐と知り合い、この少佐が会うたびにパンやロシア餡、煙草等を買れまして、地獄で仏様にあつたような人でした。

馬方を昭和二十一年三月ころまでやっておりま

すと、身体検査が行われて第三級になり第三〇八收容所に移動することになりました。日は忘れましたが、三十人ぐらいの者が第三〇八收容所に移動した当日、第三〇八收容所長の点呼がありまして、收容所長が移動した私たちの人数の確認を行いました。このとき、第三〇四收容所で私を大事にしてくれた技術少佐が收容所長に同行してきており、私の姿を見て私を呼び出し收容所長に何か話をしておりました。

その日の夜、宿舎に日本の通訳が来て私を探し出して、收容所長の室に連れて行きました。私は驚きました。收容所で所長に呼び出されるというのは特異なことです。收容所長の部屋に入ると、收容所長は私に明日から收容所長の当番兵（ボーイ）として働けと言われました。私はさらに驚き、通訳にどうして所長のボーイをやらせてもらえるのかその理由を尋ねましたところ、所長は「技術少佐が、今井はハラシヨウ サル ダート（良い兵隊である）」だから、私の身辺の仕事をやらせ

ると言ってくれました。私はノルマでの課せられた過酷な労働から解放されて収容所長のボーイとして働くことができました。馬方をやったおかげでした。これから復員するまで抑留者としては恵まれた抑留生活をしてきました。

苦しかった抑留生活の話をしてきましたが、この抑留生活をしなければならなかったのは戦争をやったからです。苦しい生活をしたが、日本国に帰ることができました。日本国に帰ることができず、未だシベリアの凍土の中に「飯を食べさせてくれ」と叫びながら眠っておられる戦友が数多くおられます。どうか二度と再び戦争を起こすことなく、この平和の生活ができる世の中を続けるようにしましょう。

私の抑留生活

愛知県 加藤 一郎

私は昭和二十（一九四五）年九月中旬、満州の奉天（瀋陽）で抑留され、九月二十七日に奉天を出発、約一カ月をかけて黒河に到着し、国境となっているアムール川を渡ってソ連に入り、バイカル湖近くのブリヤートモンゴル自治共和国のノボシビルスクというシベリヤ鉄道沿線の駅に着いたのが十一月八日で、奉天を出発してから四十日以上列車生活をしてやっと目的地に到着しました。

到着した昭和二十年十一月から昭和二十三年六月まで伐採を中心とする作業に従事し、「ダモイ」ということで昭和二十三年六月ナホトカまで来ました。何が何の因果か、ここでさらに一年三カ月の港湾工事に従事し、昭和二十四年九月二十一日ナホトカ港を出港し、同二十四日無事舞鶴に上陸、防